

再び、武蔵

蛙屋 無二斎

まさか、五十年も経ってから読み返すことになるうとは思わなかった。ある書き物をする為に必要になったのであるが、読んだのは古ぼけた吉川英治著『宮本武蔵』（全六巻、六興出版部）である。思えば、この本は自分のお金で買った最初の本である。買ったのは昭和三十八年、苦学の末に漸く高校を卒業、運よく地元（大分県中津市）では大手の鋼管製造会社に就職して間もない頃であった。

苦学と言ったが、経済的に困窮している家庭の事情をよく知っていた私は、中学校を出るとすぐ集団就職で東京か大阪へ出るものと決めていた。しかし、母の強い勧めもあって、勉強も碌にしていなかったのを通るはずもないがと、普通高校の入試を受けた。そして、生憎というのおかしいが、それに合格してしまった。入学はしたものの、入学金すら払えないのに月謝が払える訳もない。担任からしよつちゅう、『月謝はまだか？』とせつつかれながらも、なんとか一年は終わった。だが、二年生へ進級する際に、新しい教科書を買うお金がどうしても工面出来なかった。一冊の教科書も無しに登校するほどの度胸のなかった私は、数日家でぶらぶらしていた。それを見た隣の卵の行商をしているおじさんから、「ぶらっとしているなら働いてみないか？」という誘いに簡単に乗ってしまい、知る人もいない隣県筑豊炭田の田川市の製麺所に住み込んだ。

そこで働き出して見て、うどんの配達を主とする仕事だが、丁稚奉公みたいなきついものだと分かったが、もう遅かった。そこで何とか一年間我慢出来たのは、偏に美味しいうどんと腹一杯食べられるご飯のせいであったと思う。一年後、店の主人から夜学に通わせてやるし、車の免許も取らせてやるなどと慰留されたが、私は弟の集団就職と入れ替わりに高校に復学した。一年前、学校を退学とせずに休学しておいたことが、弟の不運とは逆に私に大きな幸運をもたらすことになるが、それは後に触れる。

吉川英治の『宮本武蔵』といえば、日本人に宮本武蔵像全体を初めて植え付けた本である。戦前の新聞連載中から大変な好評を得て、昭和三十二年に初版が出されている。六年後に私が買った版が二十九刷であるから、当時の人気の程も窺える。高校に復学してからの私は、図書館でかなりの本を読んでいた。当時、まだ執筆中であった

山岡宗八の『徳川家康』もその一つであった。この本も、従来の徳川家康像を根本から覆した物として知られる。教科書にはない歴史の見方をこの本から教わった。宮本武蔵は在学中から読んで見たい本であったので、自分で最初に買うことになったのも必然的な所があった。

私はこの本を愛読書として何度も読むつもりで買ったのであるが、一度通して読んだ後は、実際には数回拾い読みをただけで、全体を通して読むことはその後の五十年近くなかった。今回、読む為に取り出して見ると、一冊は僅か二百八十円、紙は藁半紙よりちよつと上等な程度である。印刷は誤植や活字の欠けや逆転など校正漏れが結構多く、所々一字から数字も印刷がされていないなどと、さすがに今と比べれば相当に雑である。また吉川英治の表記としての特徴と思われるが、詰まる音の「きつと」「やつと」など、今では小文字で表現される「つ」が、全て大文字で「きつと」「やつと」などと表現されていることにも気が付いた。

また、内容としては、最初読んだ時には気が付かなかったいくつかの特徴にも気付いた。武蔵とお通の度重なる離合は、この書のひとつのテーマであるから当然であるが、他にもたくさんの出来過ぎとも思えるほどの、偶然の巡り合わせが盛り込まれている。例えば、武蔵の最初の弟子の丈太郎とその父親、二番目の弟子の伊織とお通(姉弟)などである。

では私は、この『宮本武蔵』から何を学んだのであろうか？ システムエンジニア(SE)として長年働いた私は、三十代の後半に上司の課長から、『お前には、しぶとさ以外の何もない』と言われたことがある。要は、「お前は馬鹿だ」と言われたのである。それに反発した私は、

お前にはしぶとさ以外何もないしぶとさが活きればよからう

という歌を詠んで、その上司へのリベンジを誓ったものである。正に、このしぶとさを宮本武蔵から学んだのである。どんな境遇境涯に陥っても、決して音をあげないと。

SEの仕事はプロジェクトを組むものが多く、短くても二年、長ければ四年五年もかかる。ハードウェアの製作と違って、ソフトウェアの制作は出来上がったものが、形として目には見えな。長丁場の中では、成果が目に見えないことに耐えることが求められる。しぶとさが一つの武器なのである。挫けそうになれば、武蔵の苦闘に想いを馳せて我慢した。持って生まれた性質気質という物もあつたとは思いますが、海外での大きな仕事も含め、SEとしての職務を全う出来たのもしぶとさのお陰であつたと思う。後に、私が大きな仕事を仕事に仕上げた時に、先の課長が、『あいつは俺が育てた』と言って、周りの響聲を買ったという話を聞いた。私は、しぶとさだけではなく、ちゃんと頭も使つてリベンジ出来たと思つた。しかし、思えば彼も反面

教師ではあつた訳である。お礼を言うべきかもしれない。

SEとしての成功の裏には、もう一つの大きな要因がある。先に、高校を退学にせずに休学としていたことが、自分に幸運をもたらしたと言ったが、それは次のようなことである。就職した会社では原価計算をしていたのであるが、二年後、半ば強制的に尼崎の鉄鋼短期大学（現産業技術短期大学、鉄鋼連盟の創立機械科に、二年間の留学を命じられた。中学を出たら就職しようと思っていた私に、学費は只、給料も賞与も丸々貰つて勉強が出来、おまけに短いながらも春夏冬休み付きという、願つてもない環境が与えられたのである。しかし、全く興味のない分野である上に、普通科高校で高等数学など全く勉強していない私には、誠に不向きで辛い勉強であつた。二年後の帰社に当たつて、純粹の機械屋としての仕事は無理と判断した私は、叱られるのを覚悟で、会社に生産管理系の仕事を願い出て、そのように計らつて貰つた。

この二年間の機械科での勉強とその後の生産・工程管理業務の経験が、後に大きな製鉄所のSEとして働くようになって活きたのである。コンピュータを使うシステムを作るSEの仕事は、高度な専門性を持つ分野が多いが、一方で、システムの設計では対象全体を浅く広く見る能力を求められるし、高度なプロジェクトのマネジメント能力が求められる。私の勉強と経験が、この両面で活かされたのである。

私の仕事に対するモットーは、与えられた仕事は一日も早く卒業し、次の大きな仕事を求める。直接の業務だけでなく周辺を少し広げて勉強し、その業務の第一人者になるということであつた。コンピュータの世界は歴史が浅く、設計やテスト、マネジメントなど様々な分野での体系化が遅れていた。懸命に、世界の先進文献を探して勉強した。失敗を活かすことにも努めた。お陰で、失敗の多いシステム開発業務の中で、多くの成功体験を積むことが出来た。私の成功は、元より功なり名遂げたというようなものではない。自己の能力を精一杯活かして、少し頑張ったところで成功を収めたというレベルである。それが出来たことを私は幸運だつたと思つているのである。反面、中学を出ただけで終わってしまった弟に対しては、今でも申し訳ないという気持ちがある。

私は四十代の前半、左目が失明に繋がりがかねない『虹彩炎Ⅱぶどう膜炎』という難病に罹つた時に、原因を究明出来ない医師から、度々『未熟児と言われたことはありませんか?』と聞かれた。戦中の生まれであるが、両親や年の離れた兄達からもそう

いうことは聞いていなかった。それよりも、育ち盛りの時に碌にご飯も食べられず、今なら間違いない栄養失調と言われる程、チビでガリガリに痩せていた方の影響が大きいのではないかと、素人考えで思っていた。

また、関係があるのかどうか分からないが、私は目に多くの弱点を抱えていた。幼少の頃からの強度の近視、斜視、乱視に加えて、長じてからの左目の虹彩炎、眼腱下垂と言ったものである。また極端な動体視力の弱さがあり、早い動きをするものへの反応が極端に弱い。体も瞬発力には極端に欠けていたから、スポーツでも緩い動きをするものしか出来なかった。例えば、野球の打者や守備、短距離走、テニス、卓球、剣道などには、全く手が出せなかった。反面、水泳、野球の投手、サイクリング、ゴルフ、マラソンなどゆっくりした動きでいい物や、耐久力・持久力を求められる物は出来た。又、器用なところもあつて、得意な水泳では誰にも教わらずにバタフライをマスターし、五十メートルを三十三秒で泳いだ記録も持っている。草野球の投手としては、無四球試合を何度か経験するほどのコントロールも身に付けていた。

人は弱点ばかり持つ物でもないし、長所だけを持つ物でもない。視点を代えれば、長所は短所に、短所は長所にもなる。如何に長所を活かす対象や場所を見付けるかであろう。私も古希に近くなって来た。これからも生涯学習をしながら、もつと何か自分に向いていることはないかを探し続けて行きたい。取り敢えずは、『宮本武蔵』を精読して、当面の課題に挑戦して行きたいと思う。